

看護師の子育ての実態と子育て支援ニーズ

石上 智美 徳田 克己

The Actual Conditions of How Nurses Rear Their Own Children and Their Requests for Help in Child Rearing

Tomomi Ishigami, Katsumi Tokuda

Abstract

This study was conducted on 146 nurses who work for average hospitals in Akita and Ibaraki prefectures regarding the actual conditions of how nurses rear their own children and their requests for help in child rearing.

This study provides the following results;

1. Nurses received much help in rearing their children from their husbands, parents or parents-in-law when they work at night or on their days off.
2. Nurses were torn between their desire to devote themselves to rear their children and their wish to continue their work in the forefront of nursing.
3. Many nurses strongly wished for nursery facilities which are available at night, full-time, during their days off and which can accept sick children.

Key Words: nurses, child rearing, help in child rearing

1. はじめに

現在、女性の社会進出に伴い、多くの子育て支援事業が推進され、実質的効果を挙げている。しかし、実施されている公的子育て支援事業のほとんどは、一般的な家族形態と就業スタイルをとる家庭をモデルとしており、深夜勤務や不規則時間勤務などを行っている母親のいる家庭に対応しているわけではない。

看護師の勤務には夜勤等があり、また時間的拘束が長いケースが多い。現状では看護師の子育てを支援できる体制が十分には整っておらず、子どもをもつ多くの看護師が自分たちの勤務形態にあった子育て支援を望んでいる。看護師の子育ての苦悩に関しては、藤岡¹⁾がその著『看護婦たちの子育て』のなかで詳しく述べている。その著書には、子育てをしている看護師は常に「子どもをダメにしているのは自分ではないのか」「自分と子どもを追い詰めながらなぜ仕事を続けるのか」と自問し続けており、勤務条件に合った子どもの預け先の確保に四苦八苦し、医療現場で活躍したいという自己実現の望みと、家族や子どものことを思う気持ちとの間の葛藤で常に苦しんでいる姿が克明に綴られている。

そこで本研究では、夜勤等の不規則勤務の必要のある病院に勤務している看護師（未婚者を含む）を対象にして、子育てに関する実態調査を行うとともに、過去に必要なと、あるいは現在必要としている、加えて将来必要になるであろうと考えられる子育て支援ニーズについて質問紙を用いて調査し、看護師が必要としている支援の内容を明らかにしたいと考えた。

2. 方 法

(1) 調査対象者

秋田県及び茨城県にある3つの中規模病院に勤務する看護師146名（秋田県96名、茨城県50名）を対象とした。このうち、調査時点において、就学前の乳幼児あるいは小学生がいる者及び過去に子育てを経験した者が95名（以下、育児群とする）、未婚で子どものいない者が51名（以下、非育児群とする）であった。なお、育児群には未婚で子どものいる者2名を含んでいる。対象者の年齢は表1のとおりである。

育児群の95名の内訳は、就学前の乳幼児がいるが小学生はいない者が55名、乳幼児と小学生がともにいる者が12名、小学生がいるが乳幼児はいない者が17名、以前子育てを経験しており調査時点で小学生以下の子どもがいない者が11名であった。また勤務状況については、日勤のみの者29名（95名のうちの31%）、準夜勤がある者29名（31%）、夜勤がある

表1 対象者の年齢

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	無回答
育児群	35名	36名	22名	1名	1名
非育児群	42名	7名	2名	0	0

者63名(66%)であった(準夜勤と夜勤は複数回答)。

なお、茨城県の2病院については院内保育所が設置されているが、秋田県の病院には院内保育所はなかった。

(2) 調査手続き

調査は質問紙を用いて実施した。3つの病院とも、看護部長を通じて質問紙を全看護師に配布し、留置法によって回収した。調査は反応の歪みを避けるために無記名で行った。

調査は、秋田県の1病院に関しては2003年6月、茨城県の2病院に関しては2003年10月～11月に実施した。

(3) 調査項目

看護師の属性、子育ての実態、子育て支援ニーズに関する項目を以下のように設定した。

- ①勤務している病院の所在地 () 県
- ②年齢 (20歳未満 20歳代 30歳代 40歳代 50歳代 60歳代)
- ③子育て経験を尋ねます。当てはまるもの全てに○をつけ、数字を書いて下さい。
 - () 現在、就学前の子どもがいる。() 歳
 - () 現在、小学生の子どもがいる。() 名
 - () 以前、子育てを経験した。() 名
 - () 結婚しているが、子どもはいない。
 - () 未婚である。
- ④ご家族のことについて
 - A.配偶者(夫)と子どもがいる方にお尋ねします。
 - a.夫は子育てに協力してくれますか(してくれましたか)。
 - (よく 時々 あまり 全く) 具体的にはどのような協力ですか。
 - b.夫と子育てや家事の分担・協力について話し合いをしたことがありますか。
 - (よく 時々 あまり 全く) 結果的にどのようなになりましたか。
 - c.夫以外の家族(祖父母など)は子育てに協力してくれますか(してくれましたか)。
 - (よく 時々 あまり 全く) 具体的にはどのような協力ですか。
 - d.子どもができた場合に、ご自分の勤務との関係をどのようにしようと思っていましたか。当てはまるもの全てに○をつけて下さい。
 - () 子育て中も、それ以前と同じ勤務状況(夜勤あり)で働きたい。
 - () 子育て中は、夜勤などのない勤務状況で働きたい。
 - () 子育て中は、仕事をやめて、子育てに専念したい。
 - () 子育てを助けてくれる人がまわりにいれば、夜勤も構わない。
 - () その他
 - e.子育て支援の利用経験についてお尋ねします。当てはまるもの全てに○をつけて下さい。
 - ()

- () ベビーシッターを利用したことがある。
- () 家政婦を利用したことがある。
- () ベビーホテルを利用したことがある。
- () 保育所の延長保育を利用したことがある。
- () その他

f.子育て中に、勤務との関係で困ったことがありましたか。それはどのような状況でしたか。また、それをどのように解決しましたか。

B.全員の方にお尋ねします。

a.あなたの勤務状況を教えてください。

- () 日勤のみ (時～ 時)
- () 準夜勤あり (時～ 時)月に () 回程度
- () 夜勤あり (時～ 時)月に () 回程度
- () その他

b.看護師が子育てのために離職したり、転職したりしなくてはならない現状がありますが、このことについてどのように感じますか。

c.看護師の子育てのために、どのような支援が必要であると思いますか。具体的に、お考えを教えてください。

3. 結果と考察

(1)勤務状況と子育て経験

表2に勤務状況と子育て経験の関係を示した。なお、ここでは乳幼児と小学生がともにいる者は「乳幼児がいる」群に入れてある。

準夜勤があるかどうかについては、その病院の勤務体制（2交代制か、3交代制か）によって異なるので、単純に数値を比較できないが、夜勤についてみると育児群は非育児群よりも夜勤のある者の割合が少なく、日勤のみの者が多い。しかし、両群で差があるとはい

表2 勤務状況と育児経験の関係

	日勤のみ	準夜勤	夜勤	無回答
育児群	29名 (31%)	29名 (31%)	63名 (66%)	0
乳幼児がいる ^{注1)}	19名 (28%)	21名 (31%)	45名 (67%)	
小学生がいる ^{注2)}	7名 (41%)	7名 (41%)	10名 (59%)	
以前子育てをした ^{注3)}	3名 (27%)	1名 (9%)	8名 (73%)	
非育児群	1名 (2%)	43名 (82%)	48名 (94%)	2名 (4%)

(育児群の%の母数は95名、非育児群の母数は51名)

(複数回答)

注1)%の母数は「乳幼児がいる」67名

注2)%の母数は「小学生がいる」17名

注3)%の母数は「以前子育てをした」11名

え、乳幼児のいる看護師でさえ7割近くが夜勤をしていることがわかる。

(2)夫や家族の協力

育児群95名に対して「夫が子育てに協力してくれるか（してくれたか）」について尋ねたところ、「(よく、あるいは時々) 協力してくれる (してくれた)」と回答した者が8割以上であった。

また具体的な協力内容としては、「子どもをお風呂に入れる」(有効回答者86名中39名、45%)、「妻が仕事中の育児の全て」(28名、33%)、「遊び相手」(27名、31%)、「食事の世話」(22名、26%)、「オムツ交換」(17名、20%)、「掃除や食事の用意を含めた日常の家事全般」(16名、19%)、「保育所への送迎」(13名、15%)などが挙げられた。これらの内容から、一般の父親と同様に、子どもをお風呂に入れることや子どもの遊び相手になることが多いことがわかる。しかし、看護師の夫として特徴的であるのは、妻が勤務をしている時の子育てを全て夫が行うとしている者が33%もいる点である。これは一般の父親ではみられない傾向であり²⁾³⁾、看護師の夫としての意識(妻を支えようとする意識、自分以外に子育てをする人がいないという責任感、仕方がないというあきらめなど)がうかがえる点である。

妻が看護師として働いていることによって、夫が家事・子育てに関わる程度が高まっていることは事実であるが、それに対して看護師である妻はどのように考えているのであろうか。今回の対象者の多くは、どのような協力があったかという質問に対して「お風呂に入れてくれる、発熱したときに病院に連れて行ってくれる、遊んでくれる、寝かせてくれる」などのように、夫が子どものために、あるいは妻のために「してくれる」という表現をする傾向があった。すなわち、対象者の多くは、「家事や子育ては夫と妻が分担すべきことであって、妻が夫に協力を依頼するものではない」という考え方ではなく、妻は子育てに協力している夫に対して「負担をかけている」と考えている傾向があることがわかる。

次に、夫以外の家族(祖父母など)の協力の有無を尋ねたところ、85%の者が「(よく、あるいは時々) 協力してくれる (してくれた)」と答えている。「夫が子育てに(あまり、あるいは全く) 協力してくれていない」と回答した7名についてみると、夫以外の家族が「よく協力してくれる」と回答した者が4名、「あまり協力してくれない」1名、「全く協力してくれない」1名、無回答1名であった。これらのことから、夫や家族の協力がほとんどないのは2名のみであることがわかった。

夫以外の家族で最も協力してくれているのは祖母(妻の実母あるいは義母)であることが自由記述の回答からうかがえた。「実母が、私が夜勤などで不在の時の全ての子育てをしてくれている」、「私の両親が保育所の送り迎えをしてくれている」などのように看護師の実父母が協力しているケースと、「自分が不在の時には、義母が夫とともに子どもの世話をしてくれる」というように、義父母が積極的に協力しているケースがあった。

祖父母の協力内容についてみると、最も多かった回答として「母親が仕事中の育児の全て」(有効回答者89名中56名、63%)があり、次いで「保育所への送迎」(21名、24%)、

「子どもが病気のときの看病」(21名、24%)、「子どもの食事の世話」(19名、21%)などがあった。

(3)夫との話し合い

家事や子育ての分担・協力について夫と話し合いをしたことがあるかどうかについて尋ねた結果、約半数の者が話し合いをしていることがわかった。話し合いをしていない者のなかには、「夫が積極的に協力してくれるので話し合う必要がない」というケースがあり、話し合わないことが非協力的であるというわけではない。

話し合った結果として、夫の態度がどのように変化したかについて尋ねたところ、70%の者が「話し合いの後に夫が協力してくれるようになった」と回答している。父親としては、家事や子育てに協力したい気持ちがあっても、具体的に何をどのようにすればよいかかわからないことも多く、具体的に話し合うことが重要である。

(4)子どもが生まれる前に望んだ勤務形態と実際の勤務状況

子どもが生まれる前に望んだ勤務形態と調査時点での実際の勤務状況の関係を表3に示した。なお、この処理については、乳幼児あるいは小学生を育てている84名を対象にした。子どもが生まれる前に望んだ勤務形態についてみると、「子育てを助けてくれる人がまわりにはいれば」(46%)、「それ以前と同じ勤務状況で」(33%)のふたつの回答はともに夜勤もやりたいという意思の表明であり、仕事に対する積極的な姿勢が示されている。一方、「夜勤などのない勤務状況」を29%の者が、また「仕事をやめて子育てに専念」を18%の者が選んでおり、子育てを大事にしたいという気持ちが強くあったことがわかる。

次に、子どもが生まれる前に望んだ勤務形態と調査時点での実際の勤務状況の関係についてみる。「子育てを助けてくれる人がまわりにはいれば夜勤も構わない」及び「子育て中も、

表3 子どもが生まれる前に望んだ勤務形態と実際の勤務状況

勤務形態	生まれる前の希望	実際の勤務状況		
		日勤のみ	準夜勤あり	夜勤あり
育児を助けてくれる人がまわりにはいれば夜勤も構わない	39名 (46%)	6名	315名	30名
育児中もそれ以前と同じ勤務状況(夜勤あり)で働きたい	28名 (33%)	0	15名	26名
育児中は、夜勤などのない勤務状況で働きたい	24名 (29%)	16名	3名	8名
育児中は、仕事をやめて子育てに専念したい	15名 (18%)	9名	4名	6名
その他	2名 (2%)	0	1名	2名

(%の母数は乳幼児あるいは小学生を育てている84名)

(複数回答)

それ以前と同じ勤務状況（夜勤あり）で働きたい」としていた67名のうち、調査時点において「日勤のみ」で働いている者は6名のみであった。一方、子どもが生まれる前に「夜勤などのない勤務状況」を望んでいた24名のうち16名が調査時点で「日勤のみ」の勤務をしており、自分の意思によって現在の勤務形態を選択している状況がうかがえる結果であった。

(5) 子育て支援の利用経験

育児群95名に対して、子育て支援の利用経験の有無を尋ねた結果、約4割を超える者が地域の保育所や病院内の保育所を利用した経験があることが確認できた。またベビーシッターを利用したことがある者は4名のみであり、家政婦やベビーホテルの利用者は皆無であった。

これらの結果は調査地域の影響を強く受けていると考えられる。つまり、今回の調査地域にはベビーホテルはなく、またベビーシッターや家政婦を積極的に活用するという考えが大都市部ほど強くない。さらに、それらを利用する際の経済的な問題もある。

このような状況を考慮しても、看護師が利用している子育て支援の資源の中心は地域の保育所と院内保育所であることは確かである。最近では地域の保育所においても利用者のニーズに対応して延長保育等が行われるようになってきたが、看護師の夜勤などに対応した夜間保育や24時間保育、子どもが病気の際にも保育してくれる病児保育、休日の出勤に対応した休日保育、学齢の子どもを対象にした延長学童保育などはあまり行われていない状況であり、「看護師が保育所に子どもを預けていれば安心して働ける状況にある」とは言いがたい。

また、最近特に病院内に設置される院内保育所が増えている状況にあるが、保育時間の制限がある、土日には閉鎖されている、保育されている子どもの人数が少ないために閉塞感がある、地域との関係が薄くなるなどの問題があり、十分に機能している病院ばかりではない。

(6) 子育て中に勤務との関係で困ったこと

子育て中に勤務との関係で困った内容として最も多かった回答は、「子どもが急な病気やけがをしたときに仕事を休めない」（有効回答者90名中69名、77%）であり、次いで「勤務が定時で終わらず、保育所の迎えに間に合わない」（13名、14%）、「保育所や学校の行事に参加することがむずかしい」（10名、11%）、「子どもの世話をじっくりしてあげられなくてつらい」（4名、4%）などがあった（複数回答）。

具体的な記述を紹介すると、「勤務中に、保育所から子どもの体調が悪いという報告を受けた時に迎えに行けない」、「子どもが発熱すると保育所に行かせることができないので仕事を休まなくてはならず、職場に迷惑をかける」、「急に子どもが発熱して具合が悪い時でも夜勤をしなければならぬ」、「子どもの具合が悪い時にすぐにかけてやれず、祖父母に頼むことになるが、本当は自分が行ってやりたい」、「ベビーシッターなど利用したい

と思うが、お金がかかるし、その人が信頼できる人なのかどうかかわからず、心配で利用できない」、「いつも面倒をみてくれている祖父母が冠婚葬祭などで急に都合が悪くなると、誰も子どもの世話ができなくなる」、「定時で帰れることがほとんどなく、食事を作ることができない」、「日勤の帰りが遅く、帰宅してから食事の準備、子どもの世話、その上に仕事の持ち帰りがあり、心身ともに疲れる」などがあった。何とかしたいがどうにもならないという苦悩が切実に伝わってくる記述が多い。

困った場合に、結局どのように解決したかを尋ねたところ、祖父母に協力してもらったケースが43%（89名のうちの38名）、職場に勤務調整（欠勤、早退、時間休）をしてもらったケース38%（34名）、夫に協力してもらったケース16%（14名）、保育所に特別に延長保育・休日保育・臨時的休日保育などをお願いしたケース8%（7名）、解決できなかった（子どもを家において仕事に出かけたなど）ケース3%（3名）であった。ここでも、看護師の子育ての協力者として祖父母の存在が大きいことが明らかになった。

(7) 子育てのための離職・転職

子育てのための離職・転職についての考えを尋ねた結果を表4に示した。この表をみると、育児群、非育児群ともに、子育てと仕事の両立はむずかしいので離職や転職に至っても仕方がないととらえている者が最も多いことがわかる。しかし、育児群ではそれ以外に、子育て支援の充実を図り離職・転職を避けられるようにすべきである、あるいは子育てに理解がある職場の雰囲気を作るべきであるという意見が強くあった。これらの意見は非育児群にはほとんど表れていない。このことは、仕事と子育てを両立させようとしている子育て中の看護師にとっては、子育て支援策の充実や職場の雰囲気づくりが非常に差し迫った問題であることを示していると言えよう。

具体的な記述をみると、離職・転職は仕方がないという意見では「子どもの具合が悪い時にいつも帰るようなことになれば、他の職員や利用者にも迷惑をかけるので仕方がない」、「子どもが小さいうちは病気にかかりやすく、自分自身の体調も万全ではないので仕方がない」、「仕事にも責任があり、子育ても大切である。その狭間に立ち、両立はとてもむずか

表4 子育てのための離職・転職に対する意見

	育児群	非育児群
子育てと仕事の両立はむずかしく離職・転職は仕方がない	46名（52%）	24名（48%）
離職・転職を避けるために子育て支援の充実を図るべきである	19名（22%）	2名（4%）
育児中の看護師に理解がある職場の雰囲気を作るべきである	8名（9%）	0
夫や家族の協力があれば両立できる	5名（6%）	2名（4%）
子育てを優先すべきである	0	4名（8%）
その他	7名（8%）	15名（30%）

（育児群の%の母数は88名、非育児群の母数は50名）

（複数回答）

しい。しかし働かなければ収入がない。子育てを優先して考えると辞めるしかない」などの意見があり、苦悩の様子がわかる。

一方、離職・転職をしたくない、あるいはするべきではないという意見では「子どものことで多少自分を犠牲にしてもやむを得ないが、離職するとその間に医療がどんどん進んでしまい、復帰するのが怖くなる。どうにかして子育てをしながら仕事は続けていきたい」、「働きたいという意思があっても家庭の事情があって働けないという状況はとても残念である。両立できるような労働環境や職場の雰囲気を作っていくべきである」、「私自身は結局、実父母との同居を選択した。仕事を続けたかった。退職したくなくてもやむを得ず辞めていく人が多く、有効な支援策があればと悔しく思う」などがあった。

現状では、祖父母や夫の協力が十分に得られない場合、また周囲の協力がある程度得られる場合でも、子どもが生まれれば、看護師は「仕事をやめるか、夜勤などのない勤務に変わるなどして、子育てに重きを置いた生活をする」か、あるいは「仕事と子育ての両立を図りながら精一杯がんばっていく」かのどちらかを選ばざるを得ない状況にある。祖父母や夫が、看護師の仕事を十分に理解して全面的にバックアップしてくれ、子育ての心配なく働いている例もないわけではないが、それは現状では極めて例外的である。

(8)看護師の子育て支援に関する考え方

ここまで述べてきたように、子育てをしている看護師は、常に仕事と子育ての両立の努力を続け、苦悩している。その苦悩のなかで、「看護師にはこのような子育て支援策が必要である」という切実なニーズが生まれている。ここでは「看護師の子育てのために、どのような支援が必要であると思うか」という質問に対する回答をいくつか挙げ、そのニーズを理解したい（以下の①～⑭）。

- ①延長保育・病児保育・夜間保育をしてくれる施設が必要だ。看護師は夜勤もあるので、周囲に手伝ってくれる人がいない場合は、支援してくれる施設がなければ仕事はできない。
→延長保育、病児保育、夜間保育
- ②病院の中に24時間保育をしてくれる保育所があればよい。どうしても時間内で仕事が終わらないことがある。→院内保育、24時間保育
- ③病児を預かってくれる保育所があればよい。食欲も戻り、熱は落ち着いてもその後2～3日は仕事を休んで様子を見なくてはならないので。→病児保育
- ④子どもの具合が悪い時でも預かってくれる保育所がほしい。その日の朝に連絡してもすぐに対応してもらいたい。→緊急対応可能な病児保育
- ⑤勤務が不規則であるため、夜勤明けなどで用事を済ませたい時、1時間でも保育してくれるような融通の利くシステムがほしい。→一時保育
- ⑥子どもが病気の時などに急に休んでも、他の職員が困らない程度の勤務職員の人数が必要である。就学前の子どもがいる職員が多い職場には、職員を増員できる制度も必要だ。
→職場の人員の増員
- ⑦子どもが就学前は日勤のみの勤務にしてほしい。→夜勤の免除

- ⑧子育て中は労働時間の短縮をしてほしい。→労働時間の短縮
- ⑨長期の育児休暇がほしい。→長期育児休暇
- ⑩土日など学校がない日に学童保育を行ってほしい。子どもたちを安心して家や地域においておけるような体制づくりが必要だ。→休日の学童保育
- ⑪地域の保育所やベビーシッターなどを活用している場合に、行政や勤務先は経済的な支援をしてほしい。→経済的支援
- ⑫子どもが病気の時、自分が勤める病院に入院させることができれば安心である。→勤務病院での一時的入院
- ⑬勤務時間が不規則であり夜勤も続けていくとなると夫の協力が必要である。そのため子どもが小さいうちは夫が育児休暇を気軽にとれないと困る。→夫の育児休暇の保障
- ⑭子育てが落ち着いた後、仕事に復帰する際に研修会等があれば、数年間のブランクがあっても復帰しやすい。→職場復帰時の研修

表5に育児群と非育児群の子育て支援ニーズをまとめた。これを見ると、第一に保育所の充実が求められていることがわかる。育児群では保育所の充実に関してより具体的で現実的なニーズがある。病児保育や学童保育の必要性については自らの子育てのなかで切実に感じていることである。それゆえに子育て経験のない非育児群ではこれらのことはニーズ

表5 必要と思われる子育て支援策

	育児群	非育児群
保育所の充実	80名(89%)	29名(88%)
そのうち、24時間保育・夜間保育	28名(31%)	10名(30%)
病児保育	28名(31%)	0
院内保育	14名(16%)	18名(54%)
学童保育	7名(8%)	0
延長保育・一時保育	5名(6%)	1名(3%)
休日保育	4名(4%)	0
夫・家族の協力	13名(14%)	4名(12%)
休暇制度の充実	10名(11%)	4名(12%)
経済的な援助	9名(10%)	3名(9%)
夜勤の免除	7名(8%)	0
職場の雰囲気づくり	7名(8%)	4名(12%)
職員の増員	6名(7%)	0
再就職時の教育	2名(2%)	0
その他	4名(4%)	3名(9%)

(育児群の%の母数は90名、非育児群の母数は33名)

(複数回答)

として挙げられていない。

また、職場の雰囲気づくりや職員の増員が挙げられている理由は、子どもの発熱や学校での行事のために欠勤しなくてはならない際に、同僚に負担をかけてしまうので非常に気がひけるという現状があるため、気兼ねなく子育てをすることができる職場の雰囲気づくりと欠勤者に対応できるマンパワーの確保が必要であるとする考えがあるからである。

しかし、院内保育所が設置されていても、延長保育が用意されていない、子どもの人数が少なく子どもの社会性の発達には好ましくない、地域の子どもたちと接する場を持たせたいなどのニーズから、あえて地域の保育所に入れる家庭もある。つまり、院内保育所は「あればいい」というものではなく、あわせて延長保育や夜間保育を実施し、加えて地域との交流ができるような工夫をしていく必要がある。

さらに、病児保育に関しては大きなニーズがあるにもかかわらず、現状ではほとんど整備されていない。今回の対象者のなかにも、子どもが発熱したがどうしても夜勤をしなくてはならず、しかもその日は父親や家族の協力を得られないために、自分の勤務している病院に子どもを入院させてもらったというケースが2例あった。しかし、このようなケースは例外的であり、多くは病気の子どもを家に残して仕事に行くか、遠くに住んでいる家族や知人に頼ることが多い。

4. まとめ

本稿では、秋田県と茨城県の中規模病院に勤務している看護師に対する子育てについての実態と子育て支援ニーズを調査した結果を述べた。看護師は夜勤があるために、また休日出勤があるために、夫や祖父母の協力が不可欠であり、実際に多くの協力を得ていること、子どものために育児に専念しなければならないという気持ちと看護の第一線で働いていたいという気持ちの間で揺れ動いていること、子育てをしている看護師は病児保育、夜間保育・24時間保育、休日保育のニーズが特に強いことなどが明らかになった。

2004（平成16）年度に最終年度を迎えた新エンゼルプランに代わり、同年12月に「少子化社会対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について」（子ども・子育て応援プラン）が少子化社会対策会議で決定された。このプランのなかで、多様な保育ニーズに対する具体的施策として、延長保育、休日保育、夜間保育、乳幼児健康支援一時預かり（病後児保育）の推進がうたわれており、2009（平成21）年度の目標値が掲げられている。

看護は女性のマンパワーなくしては成り立たない領域である。多様化している看護師の保育ニーズ、子育て支援ニーズに応えるには、これらの施策が地域に偏りなく、確実に実施されなければならない。そうしないと今後優秀な女性労働力を看護の世界で確保できないだけでなく、現在活躍している看護師たちの離職・転職を促してしまうことになりかねない。

引用文献

- 1) 藤岡和美 (1998) 『看護婦たちの子育て－彷徨える白衣の母たち－』 さいろ社
- 2) 水野智美 (2000) 「父親の家事および育児の協力に関する調査研究Ⅰ－母親を対象にした調査結果を中心に－」 実践人間学 4：1-11
- 3) 水野智美 (2001) 「父親の家事および育児の協力に関する調査研究Ⅱ－父親と母親の調査結果の対比較を中心に－」 実践人間学 5：9-19